

郷土研究 伊丹公論

復刊
第27号
通巻46号
年3回発行

発行所
伊丹市立図書館ことば蔵
〒664-0895
伊丹市宮ノ前3-7-14
☎072-784-8170
編集
伊丹公論編集委員会

誇るべき伊丹の図書館史

市制施行時から優れた民間施設

今年11月10日、市制80年を迎える本市だが、図書館ことば蔵発行の「伊丹公論」としては、その間の図書館の歩みをたどってみたい。市制施行の昭和15年(1930)当時、市立図書館はまだ存在しなかった。しかし、本紙創刊者、小林杖吉による優れた私立伊丹図書館があった。

蔵書4万冊は県内2位

伊丹図書館は、明治45年(1912)開館。小林が宮ノ前に設けた私塾「三余学寮」の付属施設だった。図書購入費は主

に私塾の月謝。早稲田大学出身の小林は大隈重信ら早稲田人脈を頼るなどして蔵書の充実を図り、大正3年(1914)時点で約4万冊を誇った。

伊丹町勢要覧昭和11年版で



小林杖吉



宮ノ前通りに面していた私立伊丹図書館Ⅱ市立博物館提供



千僧に移転した2代目の市立図書館



今の行基町にあった初代の市立図書館

ことば蔵が総務大臣賞を受賞

図書館を使った調べる学習コンクール

ことば蔵は今年1月、第23回「図書館を使った調べる学習コンクール」(公財)図書館振興財団主催)で「総務大臣賞」を受賞した。この賞は、地域コンクールの開催を通じて地域活性化に貢献した主催者(1団体)に贈られるもので、全国137団体の中から選ばれた。

地域コンクール開催を決めたきっかけは、レファレンス(調査相談)に訪れる生徒・学生の変化だった。自ら本を探すことなく単語を羅列するだけで、

本を渡されても自分で調べることができない。司書への質問が検索エンジンを使うようで、自ら本を探して様々な情報を比較しながら考えることが、不慣れな子どもたちにとって、図書館を利活用してもらいたいと開催を決めた。

調べる行為は本だけでは完結せず、様々な場所・人がきっかけとも情報源ともなる。そこで、市内施設・企業・学校との連携を図った。令和元年(2019)7月30日から5日間開催した企業や県立阪神昆陽高等学校などの科学実験講座では、実験で得た気づきや興味を図書館の本で掘り下げられるような講座を展開した。同年8月8日の柿衛文庫との連携では、伊丹に関する講座と本で、郷土への関心を広げた。

また、子どもたちに近い存在

である先生や学校司書を対象とした研修会の開催や、「トライやる・ウィーク」を通して図書館で広く情報が得られることを実感してもらうなど、学校とも協力しながら、地域全体で学びをサポートする事業となっている。どの取り組みも、図書館の考えや想いを伝えることで提案や協力を得ており、コンクールが、地域の教育環境の向上につながっているようだ。

作品は8月21日から9月15日まで募集。「ありおかしやうのヒミツ」や「ぼくらの街の宮前商店街」など、合計で21作品が集まった。

図書館は「教育と文化の発展に寄与する」ために、人と情報を繋げる施設でもある。図書館を利用することで、一人一人が人生を豊かにできるよう、今後も地域の図書館としての役割を果たしていきたい。

は、その蔵書について「兵庫県下の公私立七十四館中の第二位に至っていた」と記されている。伊丹町民は、これらの本を無料で借りられた。非常に恵まれた学習環境にあったことがうかがえる。

戦後、行基町に初の市立施設

伊丹図書館は昭和18年(1943)に閉館となったが、戦後の昭和26年(1951)7月1日、伊丹相生町615番地(今の行基町3丁目付近)に伊丹市立図書館が開館した。

書館が開館した。市勢要覧昭和28年版によると、同図書館は木造2階建て、蔵書は8千冊だった。市制15周年記念誌では、「新聞閲覧室、一般閲覧室、公開書庫、児童閲覧室、会議室、集会室、郷土参考室等を有し延二二坪、その明るくて優雅な親しみやすい姿は阪神間有数のものとなった。現在蔵書数も一万三千冊を数える様になった」と記されている。

移転先の千僧で41年

昭和46年(1971)7月、市役所の千僧移転に伴い市役所東隣に移転し、41年間親しまれた。その間の平成7年(1995)7月には、自動車文庫「こかげ号」の運行が開始された。こかげ号は約4千冊を搭載し、市内47の駐車場を巡回。貸出冊数は年間10万冊を超えていたが、分館のオープンに伴い平成13年4月に廃止となった。

4年前「図書館日本一」に輝く

平成24年(2012)7月、小林が私立図書館を設けた地である宮ノ前に移転。愛称を「ことば蔵」とし、酒蔵の跡地だったことから、建物の外観を酒蔵風にした。伊丹市内には本館ことば蔵をはじめ、南分館(ラスタホール内)、北分館(きららホール内)、神津分館、西分室と合計五つの図書館がある。蔵書数は現在、分館・分室を合わせて約62万冊に充実している。ことば蔵のコンセプトは、だれでも気軽に利用できる「公園のような図書館」。市民との協働により、本やことば文化に関する様々な活動を展開している。

その活動は全国的にも高く評価され、平成26年に、「こども読書活動優秀実践図書館」と「第1回マイクロ・ライブラリアワード」を受賞。また、平成28年に、先進的な取り組みをしている図書館に贈られる「Library of the Year 2016大賞」を受賞した。

今年1月には、第23回「図書館を使った調べる学習コンクール」で「総務大臣賞」を受賞した(左記事参照)。

清酒発祥の地であり、江戸時代には酒造業で栄えた伊丹市は、伝統の俳諧文化を生かして「ことば文化都市」を標榜する。ことば蔵は、その拠点施設として今後も市民とともに、より充実した図書館づくりを進めていく。



昭和57年(1982)、伊丹市は「歴史を今に生かす市民文

化都市」のまちづくりを提唱し、市に縁のある詩歌や文章を石に

刻み、文学碑としてゆかりの地に建立した。その碑は60を数える。そして、それを紹介する本「文学碑をたずね

郷土史こぼれ話 27

昆陽池の西行歌碑と洋画家中川一政

て」が、平成元年(1989)に伊丹市文化財保存協会から出版された。伊丹の歴史を知る上で魅力的なこの本は、今も隠れたベストセラー。市立観光物産ギャラリー(JR伊丹駅改札横)などで販売されている。

どの碑も魅惑に満ちているが、今回紹介したいのは昆陽池にある西行歌碑である。西行法師(1118年〜1190年)の名で有名だが、本名は佐藤義清(よしみず)とい、朝廷に仕える北面の武士であった。23歳の若さで出家。動機は親友の死、恋の破局など諸説ある。今年は没後830年。生涯を旅に生きた。天性の歌人として勅撰集に250余首、歌集には「山家集」があり、百人一首にも「なげきつつ」がある。

特に有名なのは「願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ」だろう。願

通る春に入滅した。「いたみ文学碑」に、西行の歌碑は二つ含まれる。その一つが今回紹介する、21番目の昆陽池公園内(昆陽池センター北側)の碑Ⅱ写真Ⅱである(もう一つは昆陽の東天神社内)。

和歌は「冴る夜はよその空にぞ鴛鴦も鳴く 凍りにけりな昆陽の池水」。解説には、「冷え冷えとする冬の夜、恐らく昆陽の池水も凍ったのであろう。いつもはそこにいて鳴く鴛鴦がよその方で鳴くのが聞こえる」。

かねてから、この揮毫者が気になっていた。理由は洋画家で文化勲章受章者、中川一政だったからである。あるとき、一政の面目躍如たるエピソードを知った。昭和初期、人気作家である尾崎士郎の新聞連載小説「人生劇場」の挿絵を頼まれた。だが、着くはずの原稿が届かな

い。画家は困ってしまった。そこで登場人物の一人で着流し姿の吉良常の絵の横に「暫く寝ておれ、原稿未着にてお前がどうなるのか挿絵画家にはわからぬ」との一文をつけた。

その気骨者の一政が、快く引き受けてくれた理由は何だったのか。つないだ紹介者は誰であつたらう。経緯は分からない。

それにしても西行との表裏一体の歌碑の完成度には感心する。左右天地に一字一字が気ままに飛びはね、何と嬉し気なこと。落款もちよい傾けた。さぞ楽しかつたらう。多分、昆陽池に來られたであらう。放浪の歌人、若山牧水とも親交があり、主宰する短歌雑誌「創作」の表紙も飾った。

(郷土史研究家 森本 啓二)

蔵出しニュース

受賞者決定

しおりんピック タイトルだけGP

左から順に金メダル、銀メダル、銅メダル、ことば蔵賞受賞作品



ことば蔵はこのほど、本のしおりの出来栄を競う「第6回しおりんピック」の金メダルに長野県塩尻市、有野陽子さん(49)を、また、架空の本のタイトルの出来栄を競う「第5回タイトルだけグランプリ」の最高賞に大阪府守口市、微述勤さん(51)の作品「丸い三角形と四角い楕円」明日退任の先生が出した最後の宿題。」をそれぞれ選んだ。

▽しおりんピック 全国から61点の応募があり、画家で市芸術家協会代表幹事の北里桂一さんが審

査して金・銀・銅メダルが選ばれた。また、来館者による投票で「ことば蔵賞」が選ばれた。

金メダルを受賞した有野さんの「金メダルありがとうございませう。動物たちの図書館をイメージして描きました。ヒツジとキリンは仲良く読書中ですが、ネコとネズミはお互いの研究に余念がないようです」と話していた。

金メダル以外の入賞者は次のとおり。▽銀メダルⅡ静岡県藤枝市の杉本有里さん▽銅メダルⅡ愛媛県松山市の野本舞さん▽「ことば蔵賞」Ⅱ加古川市の濱崎宣子さん。

▽タイトルだけグランプリ 全国から499点の応募があり、田辺聖子文学館賞には、大阪府豊中市、みし丸さんの作品「あの世サーバー情報漏洩!墓場まで持っていかれた秘密」が、宮

本輝ミュージアム賞には、東京都渋谷区、ゆきのひかりさん「鏡のない町」自分の容姿さえ確認することが出来ない世界」がそれぞれ選ばれた。怖い思わず読んでみたくなると感じさせる魅力や、想像力を喚起させられる点などが評価された。

ことば蔵賞には愛知県知多市、渡野自由さん「ペットの本音」暇すぎるのも楽じゃない」が選ばれた。

◇ ◇

ことば蔵は、第7回しおりんピックの作品を募集しています。作品は未発表のものに限り、パンチなどで穴を開け、ひもを通した状態で、令和3年1月10日(必着)までに、直接来館か郵送でことば蔵までお寄せください。なお、ご応募いただいた作品は返却できません。

伊丹俳壇

「冷酒」坪内稔典選
(佛教大学・京都教育大学名誉教授。柿衛文庫理事長)

最優秀賞

冷酒やつつきたくなる向疵

大澤 定男(静岡県藤枝市)

向傷は一緒に飲んでいる相手の顔の傷だろう。もしかしたら、けんかして殴られた傷?「あなた、あの時はかつこうがよかったよ」などといいながらいじっている。高倉健と飲んでいるようなムードだ。

優秀賞

冷酒や蒼穹丸く猪口に浮かべ

田村 宏幸(伊丹市)

片足をたてて座りし冷し酒

大野 美波(埼玉県入間市)

窓開けて満天の星冷酒澄み

竹之内 稔(神戸市)

ベランダで月夜と冷酒ビターチョコ 大野 治子(神奈川県川崎市)

冷酒もぬくとうなりし三回忌 なやな(岐阜県加茂郡)

伊丹歌壇

「映画」尾崎まゆみ選
(「玲瓏」選者。神戸新聞文芸短歌選者。現代歌人協会会員)

最優秀賞

ヒーローが敵に止めをさすやいなや

胎動が胃にクリーンヒット

はつち(三重県伊賀市)

ヒーロー映画といえば、スパイダーマンなどいろいろ浮かぶけれど、敵を倒すのを見て、すっきりするところは同じ。そこに「胎動」(妊娠中に見て居るのだろう)が加わって生まれるこの痛みと、感動。

優秀賞

荒波の言葉の海を渡り切る舟を編むあの粘り強さよ

小田 虎賢(明石市)

ポップコーンたった一粒踏みし足余韻微塵もなき帰路をゆく

ウジアズキ(東京都練馬区)

暗き淵より掬ふ哀しみいたみもて光の束に CINEMA FLORA

葉々野葉子(大阪府吹田市)

パラレルの映画の中にいるような僕を見ているボクの分身

睦月くらげ(埼玉県新座市)

湖面には月の光が訥々と今の映画の続きみたい

堺 紀彦(滋賀県高島市)

次回の兼題は、俳壇は「二月」、歌壇は「先生」とします。応募は1人各1作品、自作未発表作品に限る。応募締切は12月15日(必着)。最優秀賞には図書券千円を進呈。下のQRコードを利用すると、スマートフォンからも応募できる。問い合わせは、ことば蔵へ。





北野にある有限会社河本カメラサービスには、「職人集団」



有限会社
河本カメラサービス

☎072-783-5538

という言葉がよく当てはまる。住宅街に立地し、目立つ看板もないが、1階で受け付けを済ませて2階へ上がると、カメラの修理をする職人たちがずらりと並び、目の前の細かい作業を黙々と続ける姿に圧倒される。ここではニコン製品を中心に、一人が1台のカメラ修理を請け負う。対象はデジタルカメラからフィルムカメラまで幅広い。また、レンズの修理や修正技術にも強く、メーカーに負けない技術で客の要望に添えている。カメラやレンズの買い取りも行っている。

昭和20年(1945)、鈴木芳隆代表(44)「写真」の妻の祖父が、カメラメーカーから修理専門店として独立。伊丹の地で3代にわたって業務の拡張を続け、平成28年(2016)に現在の場所に移転した。従業員数は20人だが、平均年齢は37歳と、若い職人が多い。鈴木社長も元は職人で、先代社長の娘と結婚、後を継いだ。この会社では、職人を一から育て、メーカーの依頼に添えている。修理技術にはマニュアルがないため、個人の技量や、老舗としての長年の技術の蓄積が、この会社を支えている。



パン・オ・ルヴァンを持つ山中夫妻

北海道十勝産小麦を使う「焼きたてパン工房いたみベリー」が今年2月11日、伊丹警察署南側にオープンした。

郷土 十勝産小麦の 焼きたてパン

店主の山中政弘さん(35)は新潟出身。東日本大震災の報道をきっかけに食の大切を実感、「食べるものを作る人になりたい」と考え、関東のパン屋で修業した。「おいしいものを食べて感動する姿は万国共通。どこの国の人もおいしいものは、おいしいと感じるのを見て、やっぱりパンだと感じた」と

伊丹市千僧6-9 11時~18時 土・日曜定休 ☎072・744・0558

伊丹と灘の酒物語 年度日本遺産に認定

全国唯一「日本酒のストーリー」



「伊丹諸白」と「灘の生一本」下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷が、今年6月に令和2年度の日本遺産に認定された。平成27年(2015)から今年にかけて、全国で104の日本遺産が認定されたが、日本酒がテーマのものは全国初だ。

「澄み酒」の出現と「伊丹諸白」。「諸白」とは、麴米と掛米の両方に精白米を用いる酒だ。麴米には玄米を使用するのが一般的だったが、惜しみなく両方に精白米を使ったため、澄んでいて見た目が美しく、味も良い伊丹諸白は江戸の人々に愛され、うまい酒の代名詞となった。

日本遺産から鴻池を学ぶ

伊丹商店会シリーズ①鴻池商工会



日本遺産に「伊丹諸白」と「灘の生一本」下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷が登録され、鴻池商工会が沸いている。

鴻池は、山陰の武將、山中鹿介の長男、新六幸元が慶長5年(1600)、初めて濁酒から清酒の醸造に成功したという逸話を刻んだ鴻池稲荷祠碑を拠り所に「清酒発祥の地」とされている。平成18年度発足の同商工会は、このことを全国にPRしようと、酒樽を模した、ゆるキャラ「たるまる」の創設や日本酒学講座の開催などさまざまな取り組みを続けてきた。今回の日本遺産登録は、その大きな追い風になる。

中崎裕弘会長(69)「写真」は、「兵庫県のコロナ感染症関係助成金を活用し、地域観光を日本遺産と絡めて推進していきたい」と意気込む。さらに、今年は新六幸元の生誕450年にあたる。これを祝う小西酒造(株)の清酒「鴻池新六」720ミリリットル600円(税込)や酒入りクッキー18個入り千80円、10個入り千296円(いずれも税込)は地区内のヤマザキショップで販売するほか、NHK大河ドラマ候補

ビブリオバトルをオンラインで コロナ対策の新イベント好評

図書館ことは蔵は、新型コロナウィルス感染症拡大を受け、5月30日にビブリオバトルをオンラインで開催した。写真。

休業によりイベントが開催できない状況が続くなか、図書館イベントに携わっている市民から、「休業中にオンラインツールを使って、イベントを開催できないか」と提案をいただいた。

オンライン上でイベントを開催するのは、初めての試みだった。セキユリティ面やインターネット回線の安定性などの課題もあり、賛否両論あった。何とかこれらの課題が解決できる運用方法と、今後も同様の休業期間が生じる可能性を考慮し、開催することを決定した。

オンライン会議アプリのインストールやネットワーク回線の構築は、市の情報系部署に協力を依頼した。オンライン上で実現可能なイベントとして、ことば蔵開館当初から継続しているビブリオバトルを開催することにした。



ビブリオバトルとは、テーマに沿った本をプレゼン形式で紹介し合い、最も読みたくなる本を決める知的書評合戦。プレゼンをする人を「バトルラー」と呼び、全てのバトルラーの発表を経て、どの本が一番読みたくなったかという観点から、投票で最も票数が多かった本「チャンプ本」を決定する。

参加者の話

伊丹市、安東優汰さん(28)「ホームページを見ていて、ビブリオをオンラインで開催することを知り、すぐ申し込みました。発表中にスマホが倒れてログアウト状態になったアクシデントも、オンラインならではのいい経験になりました」

猪名川町、川崎咲花さん(16)

普段は、会場に専用タイマーをスクリーンに投影し、バトルの発表および投票は会場で行っている。これらをどのようにオンライン上で展開するかが課題となった。また、オンラインツールを参加者が円滑に使えるように説明時間も設ける必要があると考えた。提案した市民や検討事項に対して解決策を見出し、入念な準備と予行演習を重ね、イベント当日を迎えた。

参加者は12名。まずは、オンラインアプリの操作方法とイベントの流れについて説明をした。司会は、ビブリオバトル経験が豊富な参加者に託し、イベント中は図書館職員も観覧者としても多く提供していききたい。

コロナ対策を講じた新しい生活様式はしばらく続きそうだが、オンラインを活用した取り組みやビブリオバトルを今後も開催し、市民の交流の場を少しでも多く提供していききたい。

「高校の休校期間中に、ことば蔵のオンラインビブリオは初めてで新鮮だと思って参加しました。ことば蔵の進行が、参加した中では一番スムーズで、とても楽しかったです。オンラインなら、これまで行けなかったビブリオバトルにどこからでも参加できるので、これからの広がりが楽しみです」

して、ビブリオバトルを楽しんだ。テーマ「最近自宅で読んだ本」に沿った本で熱いバトルが繰り広げられた。

会議時間の制限があり、途中きりの良いところで、別会議に再ログインした。また、バトルの発表途中で、ネット回線が切れストップする場面もあったが、参加者の協力もあり全員発表でき、無事にイベントを終えることができた。

オンラインビブリオバトル以外に、オススメ本を紹介し合う「カエボン」でも、自宅からオンライン参加できる形を導入、自作の文章を持ち寄り推敲する「いたみ文芸ことそうし」でも導入を検討している。

ろん、花だけじゃない。根っこまで洗い、干して漢方薬にする。6月2日に採れば、よく効くらしい。ここは造り酒屋の前栽。十葉が雑草になっていた。

いつから造り酒屋をされていたのか定かではないが、平成5年3月31日に廃業された。丹波から来ていた杜氏さんたちの部屋も見せて頂いた。

割、猿べべ、暖気樽など色々いただいた。私の店の前に並べていたが、誰か興味があったのかもしれない。持っていた。

昔、女性には醸造には参加できなかった。でも現在は女杜氏さんがたくさんおられる様です。

ちなみに醸造されていたお酒の名は「譽鶴、養老」。私は「譽鶴をよく飲んでいました。」

酒蔵の
消えし十葉
満開よ
(平 きみえ)



日本遺産は、我が国の文化・伝統を語るストーリーが審査される。「濁り酒」でなく、伊丹で生まれた「澄み酒」のように澄んで気持ちいい話だ。そして誇らしい。

者も、このごろ世間で流行っているらしい「オンライン飲み会」なるものに参加する機会があった。これ意外とよい！顔を突き合わせて乾杯するわけではないが、家なので格好、姿勢など気を使わず飲める。

ただ拙者も俗っぽくなったものだ。時を戻したい。

(ときわ喜多)

めでた、めでたの日本遺産
巷では毎日「コロナ、コロナ」と騒がしく、よい話ほとんど聞かないが、この度、実におめでたい出来事が身近であった。

伊丹市など5市で申請していた日本遺産が認定を受けたのだ。タイトルは『伊丹諸白』と「灘の生一本」下り酒が生んだ銘醸地、伊丹と灘五郷。

オンライン飲み会で祝杯
飲み助の拙者のこと、さっそく仲間たちと街に繰り出し、伊丹の酒で祝杯を挙げたいところだったが、「三密」「ソーシャルディスタンス」なんていう、聞き慣れない言葉が飛び交うこのご時世、大事をとって「家飲み」に落ち着いた。

でも、いつも家飲みばかりではつまらない。拙



林やよい
伊丹市在住。毎日新聞兵庫版にイラストエッセイ「くるまいまする」連載中。

編集後記

新型コロナウイルス対策のため、およそ2カ月間、ことば蔵が休館になり、6月の発行ができませんでしたが、今回は絶対に発行するぞ！という気持ちで、感染に充分気をつけながら、

取材にあたりました。私自身は今号が初参加。郷土土産品紹介を担当しましたが、取材でマスクは必須、できるだけ物に触れないように、でも店内の観察には気を抜かず、考えることがたくさんあって緊張しました。

でも、店主さんのお話も盛り

り上がり楽しい時間でした。記事や校正は、編集長をはじめ、編集委員のみなさんがしっかりと修正してくれるので安心して取り組みました。

次号は、来年2月末発行予定です。ご意見・ご感想などいただけるとうれしいです。

(KUMI)